

羅生門

映画文学人生論

原作：芥川龍之介 『羅生門』 (1915) 「帝国文学」
監督：黒澤明 (1950) 『藪の中』 (1922) 「新潮」
出演：多襄丸 三船俊郎 脚本：黒澤明 橋本忍
金沢武弘 森雅之 撮影：宮川一夫
真砂 京マチ子 音楽：早坂文雄
木樵り 志村喬

下人の行方は、誰も知らない

芥川龍之介『羅生門』は私が生まれてはじめて自分の小遣いで買った文庫本である。短編集のタイトルが『羅生門』になっていた。田舎の中学校の修学旅行で京都へ行ったとき、入手したものが、期待に反して面白くなかった。

或る日の暮れ方の事。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っている。下人は主人から、四、五日前に暇を出された。餓死するか、盗人になるより外に仕方がないと思いつめている。

やがて、下人は急な梯子を、いちばん上の段まで這うようにして上りつめ、羅生門の楼の内を覗いて見た。猿のような老婆が死人の髪の毛を抜いている、「これとてもやはりせねば、餓死をするじやて、仕方がなくする事じやわいの」という。

下人は老婆の着物を剥ぎとった。足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒し、着物をわきにかかえて、急な梯子を夜の底へかけ下りた。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかり。下人の行方は、誰も知らない。

陰惨で、暗い、後味の悪い話だ。救いがない。心が豊かになったような気分にならない。なぜこんな小説がすぐれた文学と評価されるのか。中学生の私には理解できなかった。

しかし、大人になって考えてみると、これは現実の人生であり得ることだ。世の中とはこんなものだということを中学生に教え、免疫力をつけさ



羅生門

映画文学人生論

せるための予防注射のようなものかもしれない。

この小説を読んだのは、その頃、黒澤明監督の映画『羅生門』がヴェネツィア国際映画賞のグランプリを受賞して話題になったためでもある。映画の原作は『羅生門』というより『藪の中』だ。

都に近い山中で死体が発見され、身元は若狭の金沢武弘という武士であることが判明した。その件について木樵（こ）り、旅法師、放免、媼（おな）の陳述に続いて、下手人の多襄丸が犯行を白状し、武士の妻の真砂も証言するが、多襄丸と真砂の言うことが食い違っている。さらに、巫女（みこ）の口を借りた金沢武弘の証言も違う。誰のいうことが真実だかわからない。

つまり、何が真実かは、視点によって異なる。観客は誰の言うことを信じてよいかわからない。まったく救いが無い話だが、映画ではささやかな救いが用意されている。

羅生門に捨てられた赤ん坊の産着を下人が剥ぎ取って逃げた後で、木樵りが「わしには六人がいる。六人育てるも七人育てるも苦労は同じだ」といって赤ん坊を引き取る。

観客はホッとするが、原作のラストは「下人の行方は、誰も知らない」である。作者の初案では「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝ、あった」だったという。

羅生門地震辻風火事飢饉